

甲斐國やまありのこねりれい

ちうき山あり金峯山といふ山の

いたゞきに十丈の石あり、はたほ

このことくしてそはたてり、古俗

つたへてこかねなりといふ、又これ

を金剛藏王の御たいとす、この山は

みねにすいしやうあり、たにこか

ねあり、えんの行者のふるきすみ

か、日藏上人のむかしの跡、弘法大師

このところにしてをこなはせ給へり、

そのふもとに山あり、智實山といふ、か

のほとりに寺あり、長實寺といふ、此寺

の住僧行範か住房のうしろの山に

古き柿木の大なるあり、いづころ

# 【史料紹介】

## 柿木鏤字縁起

### 「本文」

甲斐國やまなしのこほりのうち

たかき山あり、金峯山といふ山の

いたゞきに十丈の石あり、はたほ

このことくしてそはたてり、古俗

つたへてこかねなりといふ、又これ

を金剛藏王の御たいとす、この山は

みねにすいしやうあり、たにこか

ねあり、えんの行者のふるきすみ

か、日藏上人のむかしの跡、弘法大師

このところにしてをこなはせ給へり、

そのふもとに山あり、智實山といふ、か

のほとりに寺あり、長實寺といふ、此寺

の住僧行範か住房のうしろの山に

古き柿木の大なるあり、いづころ

有子桶本のたふれありといひある  
 うちにていりあるといふまじきなり  
 ありとて傳ありしあるは建長三  
 年<sup>辛</sup>正月五日持仏堂のなりし  
 かうしにたふし人藤原延綱男を  
 あてゝの木をききしむ、ねより上  
 三尺はかりあけてこれをきる、ふた  
 またなるうち一方のきりくち一尺  
 あまりなり、ちいさきえたはことく  
 くきりてやのうへにをきはり  
 ぬ、もとのかたは大なるによりてしは  
 らくきらす、しかるを同七日行範  
 長實寺にまいりたるまに、弥三郎  
 をとこなをやのうへにおきくはへ  
 むかためにこれをわるに、木のなか

より<sup>(生)</sup>おいたりといふ事をしり  
 たる寺僧なし、しかるを建長三  
 年<sup>辛</sup>正月五日持仏堂のおもしに  
 をかんとために、下人藤原延綱男を  
 してかの木をきらしむ、ねより上  
 三尺はかりあけてこれをきる、ふた  
 またなるうち一方のきりくち一尺  
 あまりなり、ちいさきえたはことく  
 くきりてやの<sup>(元)</sup>うへにをきはり  
 ぬ、もとのかたは大なるによりてしは  
 らくきらす、しかるを同七日行範  
 長實寺にまいりたるまに、弥三郎  
 をとこなをやの<sup>(加)</sup>うへにおきくはへ  
 むかためにこれをわるに、木のなか

ししめふと様をりふ木れふ。  
 に梵あわれんぬへり少児あり  
 鶴熊といふ生年十二歳あり少児  
 これを見てもしに<sup>(文)</sup>たるよしを申、  
 夜にいりて行範かへりいりたるに、  
 少児このよしをつく、事のやうま  
 ことしからぬゆへに、みるにをよはす、  
 次日行範又長實寺にまいりたるあ  
 いた、めしつかふ小法師此木をたき  
 きにとりくしてた<sup>(送)</sup>かんとするあい  
 た、少児又見あひてうは<sup>(奉)</sup>ひとりて  
 か<sup>(回)</sup>くしをく、行範かへり来時、少児  
 此木をもちてきたれり、みれば  
 金剛界大日種子なり、長五寸にして

に梵字あらはれ給へり、<sup>(小、以下同)</sup>少児あり  
 鶴熊といふ、生年十二歳なり、この児  
 これを見てもしに<sup>(文)</sup>たるよしを申、  
 夜にいりて行範かへりいりたるに、  
 少児このよしをつく、事のやうま  
 ことしからぬゆへに、みるにをよはす、  
 次日行範又長實寺にまいりたるあ  
 いた、めしつかふ小法師此木をたき  
 きにとりくしてた<sup>(送)</sup>かんとするあい  
 た、少児又見あひてうは<sup>(奉)</sup>ひとりて  
 か<sup>(回)</sup>くしをく、行範かへり来時、少児  
 此木をもちてきたれり、みれば  
 金剛界大日種子なり、長五寸にして

全對衆人日種ひりり長きすふて  
 東方にあり其字様大師の御筆  
 にしるふさうりけくあて入木い  
 きおいすみにひたせるよりも  
 あさやかなり、よりて不思議の思を  
 なして梵字のほとをきりとり  
 て、寺の内の人々国のうちのた  
 かきいやしきをいはすおかま  
 しむるに、随喜せすといふ事  
 なし、しかのみならず、小松庄の  
 地頭むくのすけ源の時信、ひこ  
 ろやまひにまつはされて、れうち  
 をくはふといへともいへす、此梵字  
 の木をあか水にすゝきてのま

両方にある、其字様大師の御筆  
 にたかふところなくして、入木のい  
 きおいすみにひたせるよりも  
 あさやかなり、よりて不思議の思を  
 なして梵字のほとをきりとり  
 て、寺の内の人々国のうちのた  
 かきいやしきをいはすおかま  
 しむるに、随喜せすといふ事  
 なし、しかのみならず、小松庄の  
 地頭むくのすけ源の時信、ひこ  
 ろやまひにまつはされて、れうち  
 をくはふといへともいへす、此梵字  
 の木をあか水にすゝきてのま



の木をあり水ふすこすてのふ  
 ちしこやまひしこゆしこい  
 つぬ又しこりのふ郎次郎源の  
 信時うぬこもふぬつて島あけ  
 月うありこやまふるとはあし  
 すが水とつてすれし  
 いつぬすむつにそり地をお  
 こすも十七人一国の諸人  
 りたうやゆんといふあし  
 行記同二月十三日四とを  
 十八日にいぬくへいふ國司  
 見なにいふこあふふれすぬ  
 の不思議なりといふまふ  
 其のふたれをかくる  
 ありす顯密の法僧各密

しむるに、やまひたちまちにい  
 へぬ、又たけたの五郎次郎源の  
 信時(郎党)からうとう左衛門四郎、五ヶ  
 月(間)かあひたやみふせり、おなし  
 きあか水をのみてすなはち  
 いへぬ、そのほかおこり心地をお  
 とすともから十七人、一国の諸人  
 ほめう(歌)やまはすといふ事なし、  
 行記同二月十三日、国をたちて  
 十八日にかまくらへいる、当国司の  
 見参にいるところ、よのする  
 の不思議なりといふきせらる、  
 其の上下みなたな(事)ころを  
 あはす、顯密の諸僧各又御帰

ありて、題密の法儒者又密  
 依あり、其後まゝにひろめ  
 ちて十一月の二日まゝにひろめ  
 はりぬ、此梵字を東寺の高僧  
 たちにみせたてまつるところ  
 に、皆御信仰あり、まことに大師の  
 御筆にたかふところなしとて、  
 面々に随喜あり、これによりて  
 いよくふかき信心を發して、  
 一寺を東寺のほとりにかまへ、此  
 字をそのところにあむちし  
 たてまつらんとす、子細多といへど

依あり、其後み<sup>(部)</sup>やこにひろめむ  
 かため、同十月十八日鎌倉をた  
 ちて十一月の二日みやこにいりを  
 はりぬ、此梵字を東寺の高僧  
 たちにみせたてまつるところ  
 に、皆御信仰あり、まことに大師の  
 御筆にたかふところなしとて、  
 面々に随喜あり、これによりて  
 いよくふかき信心を發して、  
 一寺を東寺のほとりにかまへ、此  
 字をそのところにあむちし<sup>(安置)</sup>  
 たてまつらんとす、子細多といへど

りていつらんすも細多さいご  
と大概必此見聞の人々なり  
小忽法すもふれ

建長三年十二月行範注

墨付五枚 金剛三昧院懲勸修補



も大概如此、見聞の人々みたり  
に忽諸する事なかれ、

建長三年十二月日 行範注之

墨付五枚、金剛三昧院懲勸修補

## 〔解説〕

本史料は、高野山金剛三昧院所蔵で、奥書にもあるとおり、もとは続紙五枚にその内容が記されており、後に金剛三昧院の懲勸という人物によって修補されている。本卷子は木箱に入れて保存されており、木箱には「柿木鏤字縁起」と墨書された題簽が貼られていることから、史料名を「柿木鏤字縁起」とした。また木箱には高野山による調査の際に貼付された「金剛三昧院什寶 第八貳號」のラベルが貼られている。

以下に本史料の現代語訳をしておく。

甲斐国山梨郡に金峯山という高い山があり、その頂には十丈（約三〇<sup>八</sup>）の石があり、幢のように聳えたつていた。古くはこれを「黄金」といつていたり、蔵王権現の御正体としていた。この山は峰に水晶があり、谷に黄金があり、役行者の古い栖、日藏上人の昔の跡、弘法大師が修行をした場所である。その麓に山があり、智寶山という。そのほとりに寺があり、長寶寺という。この寺の住僧行範の住坊の後ろの山に古い大きな柿の木があり、いつころから生えているのか知っている寺僧もない。ところが建長三年（一二五一）正月五日、持仏堂の重しとするために、下人の藤原延綱という男に木を切らせた。根から上三尺（約九〇<sup>セ</sup>）ほどのところで切り、二股になっているうちの一方の切り口は一尺（約三〇<sup>セ</sup>）ほどであった。小さい枝はことごとく切つて屋の上に置いた。元の方は大きいのでしばらく切らなかつた。そうしたところ正月七日に行範が長寶寺に参つたところ、弥三郎という男が屋の上に置き加えるためにこれを割つたところ、木の中に

梵字が現れた。鶴熊という十二歳の小児が、これを見て文字に似ていると言ひ、夜になつて行範が帰つてきたときに小児はこのことを言つたが、本当にも思えなかつたので見ることもなかつた。次の日行範がまた長寶寺に行つたときに、召し使っている小法師がこの薪を取つてきて燃やそうとしたので、小児はその木を奪い取つて隠しておいた。行範が帰るときに小児はこの木を持つてきた。見れば金剛界大日如來の種子だつた。長さ五寸（約十五<sup>セ</sup>）で両方にあつた。その字体は弘法大師の御筆に間違いなく、書跡の勢いは墨に浸したよりも鮮やかだつた。そこで、不思議に思つて梵字の部分を取り取つて、寺の内の人々さらには甲斐国内の貴賤を問わず拝ませたところ、随喜しない人はいなかつた。それだけでなく、小松庄の地頭であるむくのすけ源時信は、日頃病に冒されていて、療治を加えても治らなかつたが、この梵字の木を關伽水ですすいで飲ませると、病はたちどころに治つた。また武田五郎次郎源信時の郎党右衛門四郎は五ヶ月間病のため伏せていたが、同じ關伽水を飲むとすぐに治つた。そのほか瘡の治まつた人が十七人あり、一国のさまざまな人々が褒め敬われないということがなかつた。行範は同年二月十三日に国を發つて、十八日に鎌倉に入つた。

当国司にお目見えしたところ、「世の末の不思議である」と随喜され、そのほかの人々はみな手のひらを合わせた。顕密の諸僧もおののまた帰依した。その後都に広めるために、同十月十八日鎌倉を發つて十一月二日都に入つた。この梵字を東寺の高僧たちにお見せ申し上げると、皆御信仰し、「まことに弘法大師の御筆に間違いはない」ということで面々が随喜した。これによつていよいよ深き信心を發して、一寺を東寺のそばに構えて、この寺をそのところに安置しようとし



た。子細は多いけれども大略はこの通りであり、見聞した人々はみだりにおろそかにしてはならない。

ところで、行範という人物はどのような僧なのであるうか。建長五年（一二五三）三月日記伊天野宮恒例八講学頭世事式條（『高野山文書宝簡集十九』、『鎌倉遺文』七五三五）などには阿闍梨行範という名が見え、高野山寺僧申状案（『高野山文書続宝簡集七十四』、『鎌倉遺文』七五七〇）から、それは定恵房だったことがわかる。この人物が長寶寺の住僧と同一人物か不明であるが、本史料が高野山に残されたということから同一人物と判断しておきたい。なお、字体は鎌倉時代のもので違わず、行範の書とみなしてよいだろう。しかし、本縁起の執筆動機については不明と言わざるを得ない。

山梨の金峰山は、『山梨県史通史編2中世』にも記述されているように、甲府盆地や長野県の佐久地方からも仰ぎ見ることのできる標高二五九五メートルの山で、修験の霊地として信仰されてきた。山頂の「五丈岩」には、大己貴命とともに国造りにあつた少彦名命が鎮座するとされ、「御像岩」とか、「蔵石」「御影石」などと呼ばれていた。しかし、本縁起の舞台となつてゐる智寶山・長寶寺という名称は、『甲斐国志』などからは検出できない。

小松庄は甲府市小松町付近にあつた莊園で、武田有義、その子有信、妻景廉娘、そしてその子小松六郎時信と伝来したとされており（『山梨県史通史編2中世』）、時信は実在の人物であつたことが確認でき、武田信時は甲斐武田氏の第七代当主である。

本縁起は『国書総目録』にも類話が検索できず、今のところ成立過程は不明である。斎藤昭俊『弘法大師伝説集』（国書刊行会）に空海

と柿に関する伝説も収載されているが、本伝説は未収録である。

なお、柿の木に関しては『宇治拾遺物語』第三二「柿木ニ仏現ズル事」という話が収載されており、醍醐天皇の御代に京の五条天神あたりに大きな柿の木で実のならないものがあり、その木の上に仏が現れて、京中の人々はこぞつて参詣して拝んだとされており、『今昔物語集』巻第二十八「以外術被盜食瓜語第四十」でも宇治の北に実のならない柿の木があり、それは境界の標示であつて異界のものが宿るとされていることが注目される。

なお、本研究は平成23年度く25年度科学研究費補助金（基盤研究（B））「高野山宿坊史料の悉皆調査に基づく高野山子院と地方大名家との師檀関係の研究（佐々木倫朗代表）」による成果の一部である。

（やまだ ゆうじ） 三重大学人文学部